

(結語)

安芸守定以来、現在に至るまでの安芸家(北小路家)代々の医家としての業績の中、のこされた資料や諸家の文献から今日までに知り得たものを述べた。今回の発表はその一部にすぎず、今後更に解明に力をつくしたい。

(北小路外科医院)

日葡辞典から見た

安土桃山時代の医学

一、医療用具

亀 節子

大槻 彰

前川 久太郎

このたび岩波書店より“VOCABULARIO DA LINGUA DE IAPAM com a declaração em Portugues” (ポルトガル語の説明を付したる日本語辞書)の日本語訳が刊行された。

イエズス会における日本語研究は、一五五〇年代のイルマン・シルバによる文典と辞書の編纂に始まるが、布教のための最初の準備として日本語修得に乗り出した各宣教師の個人的な研究が積み重ねられて誕生したのが、この長崎版『日葡辞典』である。時に、一六〇三年であった。

収録語総数三万二千二百九十三語に達するこの辞典は、特に西日本地域の話し言葉を中心にした中世から近世にかけての各層の日本語を反映し出した非常に貴重な資料とさ

れながらも、一部の識者の利用を俟つのみであったが、邦訳『日葡辞典』(以下、『日ポ』と略)の刊行によって、より広範な活用が期待できるようになった。

今回この『日ポ』から、医療、病氣、藥物、身体などに関する語を拾い上げたところ、約千三百語に及び、当時の人々の暮らしの中での病氣や医療の実態を知る手掛りとなると考え、若干の紹介と考察を試みることにした。

まず、ここでは、医療用具を取り上げる。医療用具並びにそれに関係した語は、見出し語の中に三十余り挙げられている。即ち、――藥刻み 藥刀 竹刀 藥盤 藥研 沙

鉢 乳鉢 藥鍋 藥罐 甌 煎じ藥 煎藥 煎じ減らし 煨する(以上調製服藥段階の用具及び用語)、藥袋 藥袋 印

籠 藥籠 藥籠 藥箱 藥器 藥具(以上収納用具)、平針 銀針 金針 鉄針 止(留)針 打針 灸 艾(以上鍼灸関係語)、藥筒 筒じん 押し藥 澗瓶 温石(以上服藥鍼灸

以外の医療用具)であり、問題は次の八点に集約される。

一、「本道医中に、当時無針之名譽、可云道之零落一歎」と『中原康富記』に記されてのち百数十年、衰微したとされる鍼術も一般の治療法としてなお行われていたこと

のひとつの証拠として、鍼関係用語の収録が挙げられる。

『日ポ』成立当時、我が国では、曲直瀬道三、御園意齋等の活躍を見るが、特に、御園意齋が創始したと伝えられる

「打針」及び「金針」「銀針」が収録されている点は特筆に価する。この意齋流の數種の鍼法のうちのひとつである

「止針」は『日ポ』に収録されているのと同じものか、

『日ポ』には「止針 下痢をとめるために身体の一部に刺す針」と説明されていて、『針道秘訣集』に「止針、立ッ所

ハ兩腎ナリ命門ノ相火ノ亢上スルヲ止ムルノ針ナリ」とあるのと内容的にもほぼ一致する。また、「平針」は馬や人間に行なう刺絡針として記されているが、『日ポ』以前には使用を見ない言葉である。

二、『日ポ』以前の我が国の文献には見当たらない語として、「平針」の他、「乳鉢」「澗瓶」の二つがあり、この時代に二語とも日本語に定着していたことが確認される。

三、『日ポ』以外の文献に見出し難い語として、「藥筒」「筒じん」「煎じ減らし」の三語があり、それぞれ、馬に藥を注ぎ吞ませるための筒、吸い玉、藥を煮て水分を少なくすること、の謂である。

四、『日ボ』以後の文献に見い出せない語はない。但し、「沙鉢」は、江戸前期の『和漢三才図会』や『会稽山』（近松作）などに記載を見て以降、やがて用いられなくなる。

五、用具と言葉の一对一の対応関係から離れ比喻として機能し始める語に「薬刀—薬の効め」「薬研—女陰」「灸をすえる—懲らしめる」の三つがあるが、いずれも『日ボ』では比喻の意味では扱われていない。因みに、三語とも比喻として文献に登場し始めるのは江戸中期である。

六、用途の変化という観点からは「温石」と「薬罐」の二つが重要である。『日ボ』では「温石 薬用に用いるある種の青い滑らかな小石」とあって、『本草弁疑』で取り上げられている温石が暖房用の焼き石の類であるのに対し、これは、後に『塩尻』などで温石の名称を巡って論議されている滑剤の一種と同系統のものと思ふべきか、一考を要するところである。また、「薬罐」は、この時期既に薬を煎じるための鍋から転じて、専ら温沸かしのための用具として使用されていた。

七、収納用具は互いに用途が混同され、薬の他、茶や火

薬などもこれらに納められた。なお、「百味箆筒」は収録されていない。

八、『日ボ』に付された説明の中で特記すべき事項として、薬貝には牡蠣が用いられたこと、鉄の刃物は薬物に害になるという認識から竹刀が使用されたこと、の二点がある。

最後に、「煨ツイする」というのは、灰の中で物を焼くという意味で、古く中国の南北朝時代の書と称される『炮炙論』に薬の修治法のひとつとして記されて以来伝わっているものだが、一般にはあまり使われないこのような語まで記載されているということからも、『日ボ』の収録範囲の広さが窺われる。

（東京医科大学第二解剖学教室）